唐突

ただ、神に捧ぐ。我が非才と、愚凝なる思ひ上がりのゆゑ、人は厭ひて読まざれば。神は無分別智なる全知にしあらば、自ずとこれすらをも詠む。人は見よ、生きる価値なき輩も、世には生くといふ証を。

http://svveeyh.g2.xrea.com/bbuezhyper.m4a

いはゆる ゆゑんとしも もとらず　あれにしあるがゆゑに　あれにて在(あり)　きらとても 奈辺(なへん)を 知らず

無際限なる　ありとし　あらゆる　かたちなしといふは　何もかも　一切　かたち　なくば　すべてを　かたちなし　網羅す　とても　なし　かたち　あり　といふ　自由自在(じいうじざい)義

遺漏(いらう)なく、全網羅(ぜんまうら)し、及ばざる処なく、一切之真儘(のまま)にあればありとしあらゆるは神祇と互

はじ。意欲(おもひ)せぬは原(もと)の原より意が尽くされ、元初来意欲(もとよりもとめ)ぬゆゑ。燦々光爛漫汎濫溢(さんさんくわうらんまんこえみだれあふ)るる充

満悦(まんえつ)なる太陽の做(つくる)、大圓樂(だいゑんらく)の中枢(まおくのみなか)の、環(たまき)の真奥之御中に坐す。真究竟真実義神(しんくきやうしんじつぎじん)にし在(あり)。

問ふ。「されば、何ゆゑを以て、異教、異教徒、背教、神罰あるや」

応(いら)へて曰(いは)く。「神、異叛細緻漏らさず網羅すゆゑ」と。

ただ、異叛がある。ただ、異教徒がいる。ただ、背教者がいる。神罰を下すべき者がいる。すべてを網羅する時、「すべてを網羅する」丈にて「すべてを網羅しない」「一つしか網羅しない」等を遺漏する。それゆえ、全網羅者なる神はそれらをも網羅し、かつ、それぞれ丈であることを網羅する。

$$\{\Omega / \Omega = A \cup (A|A)\},\quad \{\Omega / \Omega = \{y\}\},\ y \notin (A \cup (A|A)),\quad \{\Omega / \Omega = \{x\}\},\ x \in (B = \{x\}),\quad B \subseteq A$$

集合Ωの定義は集合Aと反Aとの和に等しく、集合Ωの定義はy元だけの集合であり、yはA及び反Aに属さず、集合Ωの定義はx元だけの集合であり、xは集合Bに属し、BはAの真部分集合、すなわちBはAの一部分である。

それゆえ、意欲する（「意欲もする」ではない）。ただ、意欲それ丈であり、意欲しないということではない。

人は思考するも、能く解せぬかのよう感覚し、又捉えられぬかのよう空想(からおもい)し、「畢竟奚(なん)ぞや」と問うが、虚しきこと。抑々(そもそも)誰が知るであろうか。又は誰が知らずにいられるであろうか。

宇宙開闢（Big Bang）の以前は時空がなかったとすれば、因果はあり得るのか。因があって果があるという流れ、時間性が必定必須と想われるからである。物理・物質的な何かを起こす場もない。いつ起きたかという時間もない。理由はもとより、原因も由来も経緯もない。むしろ、理由がないから起こり得たか。

宇宙開闢は未来ですらある。

かつて我らは広大な塩水であった。海である。海面に突き出た黒い岩から成る火を噴く

島々がわずかに点々とあると存ぜよ。未だ酸素はなく、窒素、メタン、二酸化炭素などに蔽われた、非情で、過酷な世界。湿った熱い空気が渦巻く。

島には熱水の噴出孔がある。孔のわきには水が溜まっていった。岩の上は隕石や彗星について降った有機分子があり、暖かい水に溶け、乾き、また熱水が噴いて溶け、これを繰り返す。繰り返すのうちに、化学反応が起って、そこに核酸が生じた。核酸の濃度が高くなっていくと、分子が繋がり結ばれ始める。

これがＲＮＡ（リボ核酸）である。後にＤＮＡ（デオキシリボ核酸）の基礎となっていくものである。

自然の摂理の解き難き綾の不可思議か、人知の及び難き神の意志か、これらはいつしか脂肪酸に包み込まれ、泡のようなものとなり、その脂肪酸が後に細胞膜と呼ばれるものへと進化していく。

水溜りは無数の小さな泡に占拠され、黄色い膜が張ったようになった。

その一つ一つが細胞となっていくものである。中に核酸が糸のように何本も詰まっていた。遺伝子の祖である。

細胞の原型とも言うべきこれらは、繋がり結ばれてはすぐに解壊する不安定なものであった。だが、長い長い歳月のうちに、安定を保つものらが現れる。それは壊れた素材を取り入れ、また組み上げる作用で、極々原始的な代謝であった。

かくして、デオキシリボ核酸が複製を創り始め、生命誕生である。

極微小で、儚く、壊れやすい生命は長い時間の中で、複雑な形態を取るようになった。水を介し、地表に広がっていく。川や湖へ。

乾季は極めて大きな危機であった。水がなくなると、乾いて硬くなる。細胞の先祖は素材と水とを求め、環境と苦闘し、命を繋ごうと欲す。それでも、死滅への道を辿りつつあった。増殖したいという根源的な欲求に応えるべく、生命は奮闘する。生き残ったものが後代の、古細菌（アーキア）から草木類・鳥獣までの存在者の、大本となる者へと進化していくのである。

地球に宇宙線が降り注いだ時も、進化したその一部は生き残った（進化しなかった細胞らは滅んだ）。

鑑みよ。これが人である。人の心も精神も思惟も、このような活動、現象、化学反応の累積にしかざれば、いったい、心情や思惟は何であると言えるか。かたちすらない。という以前ですらもない。解析もなく、由来もなく、唐突。

人々が言う、真実、正義、愛、真実義、実在、現実、理、真理、実存、存在、非存在、ダンマ（法）、ロゴス、意識、意志、意欲、意思、思考、感情、哲学、理性、論理、本質、数学、検証、理解、正解と誤謬、肯と否、妥当と非当、真と非、実と虚、ドクサ、自己犠牲も、すべてこの化学的な作用である。

そう、叡智、照見、阿耨多羅三藐三菩提は何か。あなた方は解脱について語る。しかし、生命の歴史を鑑みて、解脱を何だと言えるか。

畢竟、化学反応の集積でしかない。ただし、現実が我々の見たままの現実であるならば、という条件附ではあるが。

仮に、真の現実が今こうして見ているが儘に、事実又は真実であるとするならば、そもそも、この議論をも含め、思考とは、何か。真も偽も正も誤も、いったい、何であるというのか。

現在の我々の思惟の化学反応を詳細に言えば、ニューロン（神経細胞）のインパルスによるものである。たとえば、脳神経細胞に起こる化学的な現象である。その刺激によって、エゴ・トリックが起こる。個々の現象に中心たる主体者、オペレーティングをする主宰者（人、人格、個人）がいるかのような、捏造でしかない架空感覚を現象させる絡繰りである。

人は細胞による集合体の、その作用の総和の連続でしかない。そのバランスが崩れれば、人格は消える。別人になる。

化学反応の複数の作用の因縁生起でしかないというのに、中枢・中核たる主体・自己があるという感覚があると錯覚させるトリックである。

又、見えるが儘が事実・現実・真実であるならば、心情や思惟を実態に即して見よ。

それは細胞体（細胞核がある中心）、樹状突起、軸索から成る。

樹状突起は刺激を受け取る場所で、入力装置。軸索が出力装置である。

軸索にある軸索丘（軸索の起始部、軸索小丘とも）という部分で、先ほどのような要領で、インパルスが起こると、軸索がその軸索末端から神経伝達物質（グルタミン酸など）を次の細胞の樹状突起へと飛ばす。発する側の軸索末端と、受ける側の樹状突起の間隙を、

シナプス間隙と言う。

シナプス間隙を超えた神経伝達物質は受け側の樹状突起の受容体にキャッチされる。すると、どうなるか。特定のイオン・チャネルが開く。

詳細に言えば、細胞は細胞膜に蔽われているが、脳神経細胞の膜の内側は、膜の外の組織液に比べると、カリウム・イオンが多い。膜の外と比較すれば、マイナスに帯電している。細胞膜の外は、ナトリウム・イオンが多い状態である。そのイオン濃度の偏向がうちと外との電位差を做し、電位差は概ねマイナスの七十ミリボルトくらい。

これが細胞の静止状態で、膜が分極している、静止電位の状態である。

しかし、これは活動していない状態だ。

シナプス間隙を超えた神経伝達物質が受け側の樹状突起の受容体にキャッチされると、細胞膜にあるナトリウム・イオンのイオン・チャネル（イオンに細胞膜を透過させる蛋白質）が開口してナトリウム・イオンが流入し、本来は、カリウム・イオン濃度が高かった脳神経細胞内部のナトリウム・イオン濃度が上がる。

その流入とわずかな時差を置いて、カリウム・イオンの方は逆に細胞膜内から排出されていく。

静止電位の状態の時とは、内側と外側とのイオンの構成が逆転する。これが脱分極である。

ミリ秒単位の出来事であるが、脳神経細胞のうちと外との電位差の関係が逆転する。

この逆転の刹那が活動電位の状態で、すぐに静止電位に戻るが、この静止電位から活動電位への刹那の逆転は電気的な発火現象であり、これがインパルスである。

インパルスの起こした刺激が軸索丘に伝わり、軸索末端のシナプス小胞が刺激され、神経伝達物質を分泌し、神経伝達物質は脳神経細胞の間隙（シナプス間隙）を跳飛し、一つ次の、隣の脳神経細胞の樹状突起の受容体へと飛来する。

神経伝達物質が樹状突起の受容体に至ると、細胞膜にあるナトリウム・イオンのイオン・チャネルが開口し、ナトリウム・イオンを透過させる。ここでも、細胞の外にあったナトリウム・イオンが脳神経細胞内部に流入する。同じことが繰り返され、電気的発火現象、インパルスが生じる。

この繰り返しは、あたかもインパルスが脳神経細胞から脳神経細胞へと伝わって行くかのように見える。

これによって所定の生理作用が起こり、それが偉大なる思想であり、崇高なる精神であ

り、身を裂く怨念であり、浅ましき劣情である。

かくして、諸々の考概が、諸々の考概として象を具え、意識が生じる。今、まさに動いている、今、現在として現実に此處にいることを理解し、了解を構築し、人間を納得という気分（我々の理解・了解とは、〝納得〟といふ生理現象に過ぎない）及びその意識である。

それが人間にとって〝今〟そのものであって、現在という名で、自分であるかのように観じている、存在ということである。

大海原や薔薇や父母の愛やご飯の美味しさや文学や涙や感動や正義・真実や風邪熱や懈怠や足し算や美や夢想などなど、皆それである。

ただし、化学的発火現象がそのとおり見たままの化学的発火現象であることが真の現実であるとしたならば、という条件附であるが。

奚ぞあらんや、解。奚ぞあらんや、竟に逝くべき處。ただ、現実に在るといふ丈に若かず。在るといふ定義知らずも。

釈迦牟尼は罹病し、喉の涸れ渇きに苦しみ、水を求め訴ふ。真の真の不死と思ふ。

人は希ふ。幸福求め、歓び求め、希ふ。存在は未来。在ゆゑ希ふ。希ふゆゑ在。今を苦しみ、未来に苦しみなきことをぞ希ふ。

侭